セーフコミュニティ活動報告

ＳＣ活動10年を振り返って感じること
～自治会長に就任してＳＣ活動の実践に苦慮～

山　内　　勇
元亀岡市職員（ＳＣ認証の初代担当課長）
現畑野町自治会長（町内会長）

Looking Back on Safe Community（SC）Activities Over the Past 10 Years
～Struggle in Practicing SC as a Community Leader～

Isamu Yamauchi
Former Chief of Section for Authentication of SC in Kameoka City Office
President of Resident's Association of Hatano Town

はじめに

セーフコミュニティ（以下ＳＣという。）活動の取り組みが、亀岡市で始まって10年が経過した。

初めて担当した当時の想いや10年間の関わりについて学会誌へ寄稿するようにとの依頼を受けたが、何分、現役を退いて既に３年が経過しており、記憶が定かでないところもあって数値的なことや学術的なことが述べられないため、学会誌としてはふさわしくないコラムとしての寄稿となるがお許しをいただきたい。

ＳＣとの出会い

亀岡市役所に奉職していた06年当時、企画課長として本来の職務としてまちづくりプランや主要施策の進行管理、行財政改革などを担当するほか、団塊世代が第一線からリタイアする2007年問題への対応や人口政策、将来を元気付けるまちづくり政策、マニフェストづくりなどもトップの特命として受け、繁忙な日々を送っていた。

中でも、人口減少が始まり、少子化・高齢化が顕著に進行すると予測でき、住民の将来に対する不安感を払拭して、住民が安心して笑顔で日々を暮らせる基盤づくり、まちづくりが必須の行政課題であると考えていた丁度その時に、ＳＣ活動の理念と出会い、「安全安心こそが最大の福祉である」とのスローガンを掲げ、住民も一緒になって考え、チャレンジしていくことを通じて、協働意識の高まりと自主自発による地域力向上にもつなげていける有効な施策となり得るとの期待を寄せて、ＳＣの取組みをスタートさせた。

ＳＣ活動を始めた動機

安全安心は、行政のどの分野においても欠くことのできないキーワードである。

亀岡市に限らず、どこの自治体にあっても「安全安心なまちづくり」を政策の柱に掲げていろんな取り組みがなされている。しかし、現実はどうであろうか。安心感が実感できにくい社会へと移り変わっているのではないだろうか。

11年の東日本大震災以後も全国各地での震災や局地的豪雨とそれに伴う大規模な水害、土砂災害がこれまでの想定を超えて頻発している。また、東南海トラフを震源とする巨大地震や内陸型地震が危惧される中、さらに近年の異常気象で、いつ、どこで発生するかわかない風水害、土砂災害への不安は増大しているものと感じる。

一方生活面においても、モノや情報があふれ、暮らしは豊かになっているものの、その反面、人と人とのつながり、地域の繋がり、絆が薄れてきているといわれている。ピークを脱したものの毎年２万人を超える自殺者があり、弱者への虐待や人の心を逆なでする犯罪、子どもにかかわっての事件・事故も連日発生しており大変憂慮すべき事態に陥っているといえる。

これからの時代、安心して暮らしていける社会を築いていくには、すべての人、環境、条件をカバーする長期的なプログラムでもって安全を確保してことを目指すＳＣの取り組みが、救世士となっていくのではと捉え、現在取り組んでいる様々な安全安心施策にＳＣ活動の理念を付加することで、より実効性のある施策になると思った次第である。

２つ目には、現在取り組まれている様々な安全への施策、活動を横断的に連結させ、包括的にコントロールできると考えたことである。

多くの地域で、子どもや高齢者の安全、犯罪防止、交通安全、暴力追放、虐待や自殺対策、自然災害に対する対応等々にそれぞれの関係機関が、また住民も加わっていろんな取り組みが行われているが、ややもすると施策が重複していたり、環境の変化に対応でき得ず継続している施策もあるのではないか。これらの取り組みを行政の縦割りにとらわれることなく、ＳＣ活動として包括して管理・検証して進めることで、より効果的、効率的に

取り組めると考えたことである。

３つ目には、職員や住民の意識変革、シティセールスにも効果があると捉えたことである。

ＳＣという新たな切り口で行政施策を総点検する機会をつくることで、慢性化している意識を刷新し、行財政改革の新たな手法にＳＣ活動を取り組んでいこうと考えたことである。既に行財政改革を推進する中でＰＤＣＡサイクルでの検証を呼びかけてはきたが、なかなか機能していないと感じていた時、科学的・数値的に評価する仕組みを有するＳＣ活動を事例にして他の施策にも波及させることができると考えた次第である。

また、補完性の原理や市民協働を叫んでも、行政と市民意識との距離がなかなか縮まらない中で、安全・安心という市民に最も関わりやすい分野を、市民とともに考えていくことで協働の再出発を図りたいという期待もあった。

こうした新たな取り組みへのチャレンジは、職員や住民の関心を引き付けやる気を増幅させる起爆となり得ると信じ、我が国初のＳＣ認証都市として計り知れないインパクトを内外にえるものと考え当時のマニフェストの一番に掲げた記憶が残っている。

ＳＣ活動から見えてきた変化

ＳＣ活動で包括した安全安心を基軸にしたまちづくりが、住民意識に確かな変化を与えているので紹介したい。

まず一番には、ＳＣの取り組みを通して関係する機関の風通しがよくなったということである。

前述のとおり安全安心はすべての組織、分野に共通するキーワードであって関係しない機関はないとも言い切れる。行政機関どうしが情報を共有して、連携して取り組むという機運の高まりを与えたことである。

さらにＳＣ活動を推進する中で、住民の意識、行動においてもその変化を顕著に感じ得るようになってきた。

ＳＣを始めるときに住民意識調査を行っているが、認証取得した０９年にも同様の調査を行い、ＳＣの取り組みを通した意識変化を見てみた。

地域での付き合いの度合いと安全に対する意識の相関関係では、いずれも安全と感じる人が増加している。中でも地域の付き合いが強いにしたがって安全感も比例して強くなっている。（図１）

次に、地域活動への参画の度合いと安全に対する意識の相関関係についても同様の結果で、安全と感じる人が増えており、中でも地域課題に一緒に取り組む意識が強いほど安全への意識が高いことも明確であった。（図２）

ＳＣ活動との関りと安全への意識については、すべての活動分野で安全と感じる人が増えているが、特に交通事故、災害、子どもや高齢者への関心をもって参加している人ほど、その高まりが顕著であった。（図３）

これらのアンケート結果から、ＳＣ活動は安全意識の高揚とアクティブな活動を誘発している効果があることは明らかとなった。

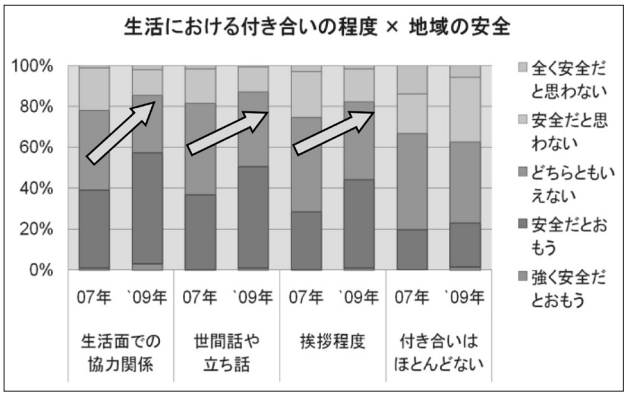

図１

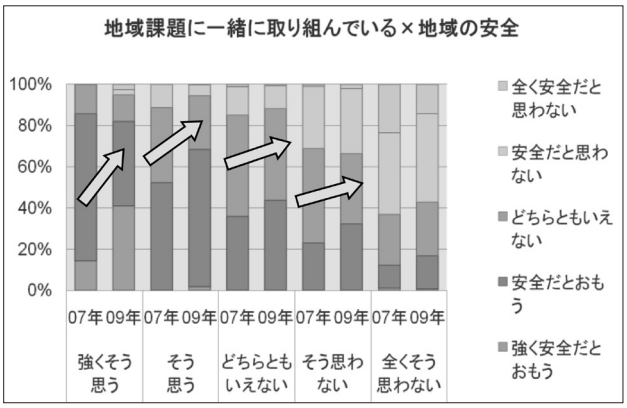

図２

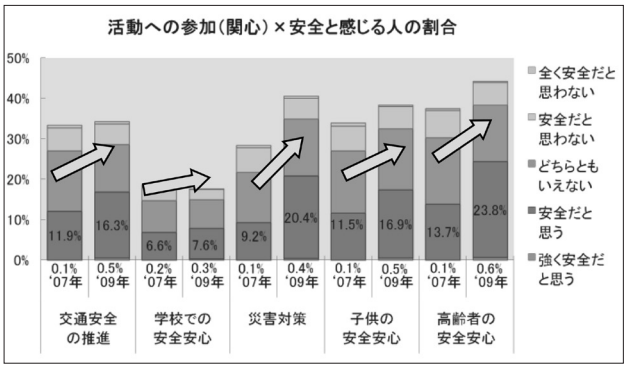

図３

現在は自治会長としてＳＣ理念を実感

亀岡市は、自治会組織が全域にあって昔ながらの地縁意識が存続している農村地域と近年に開発された都市団地が混在するまちで、血縁や地域との関わりに対する意識もライフスタイルの変化に合わせて薄れてきている感があった。当時に行った住民意識調査でも、近所の人とのつながりを大切と考えながらもお互いのプライバシーに配慮して、少し距離をおいたつながりを…という意識が勝って、近所づきあいに積極的でない住民が増加している状況にあった。

ＳＣ活動をスタートさせるにあたっては、従前から「向う三軒両隣の精神」でもって、高齢者や要支援者の存在認知と見守り活動に取り組んでいる自治会をモデルにして始めた。

しかし、実際に地域へ入ってみると倫理観に対する個人差やコミュニティの希薄化が要因して、様々な問題があることもわかってきた。一番には、近所づきあいに積極的でない人たちは、自治会に加入していないということであった。自治会との接点がないこの人たちを、地域の住民であるという意識を持たせて振り向かせていくにはどうすればよいのか？近所とのつながりが大切との意識を持たせていくにはどうすればよいのか？個々の価値観がわからない中で頭の痛い問題である。子どもを介してのつながりや趣味・嗜好、職歴など個々人の接点を探していくとともに、成功事例を示して関心を持たせていく方法を考えたが、ＳＣ活動は、行動の結果が見えにくいという点で時間と労力を要する問題であった。

ＳＣと出会ってから十余年。私は今、亀岡市役所を退職し、居住する地域の自治会長（町内会長）として、日々住民と接しながら過ごしている。

一千世帯余りの小さな地区ではあるが、自治会加入率は60数パーセントで、３人に１人は、自治会と関わりがない住民がいる。そのためいろんな事業を行うにおいても、一筋ならではいかないものばかりで、毎日がチャレンジの気持ちで苦慮している。

先般からも、年度替わりで役員交代もあったことから、順次各組織の代表や自治会を構成する各区の長と懇談を行ってきたが、共通して口に出るのは、地域の元気（活気）が薄れてきている、近所づきあいがなくなってきている、高齢独居世帯が増えて大変とのことである。

子どもの数が減って元気な子どもの声を聴く場が少なくなったことや、高齢となって活動の範囲が狭まった人たちが増えたことが、元気が薄れてきたと映っていると思える要因の一つであるが、これは我がまちに限ったことではなく、他のまちにあっても同様と考える。

問題は、自治会加入率の低さもさることながら、近所づきあいのできない人が増えてきていることである。今年の冬は、数十年ぶりの大雪で団地内道路の雪かきが大変な年であったが、一部ではあるが雪かきを一緒にしようともしないうえに、そこを通っても「ご苦労さま」「ありがとう」の声すらかけない。ごみ集積所の掃除当番を輪番で決めても掃除をしないが、ごみは当然のごとくに出しに来るといった状況で、若者に限ったものでなく高齢者であっても同じ傾向にあるということであった。

また、民生委員との懇談では、独居高齢者の安否確認、特に風水害等有事の場合の避難方法についての相談があったが、自治会に加入していない上に近隣とも良好な関係にない人については、その対応が非常に難しいとしながらも、生命にかかわる事態も想定出るために継続して何らかの方策を考えていくが必要がるとして一致した。

昔から「遠くの親戚よりも近くの他人」とか「向う三軒両隣」ということわざがあって、いざというときには、ご近所同士で見守っていく、支え合っていくことが大切とわかっていながらも、近所づきあいができない、拒否する住民をどのようにして振り向かせていけばよいのか…。朝、顔を合わせて声をかけても、あいさつすら返してこない住民をどのようにして良好な関係にしていけるのか…。

「向う三軒両隣」は、現実とは大きくかけ離れていると捉え、この傾向はますます進んでいくとも思えることから、毎日出会う住民とはこの話をして、住民の力で、真に「向う三軒両隣」のコミュニティの輪が広がっていくよう、奮闘しているところである。

大人の意識を変え、地域に関心を持たせて振り向かせていくことは大変であるが、私が学んできたＳＣの基本「向う三軒両隣の精神」「安全安心は最大の福祉である」を説き続けて、自治会長の務めを果たしていきたく思っている。

【調査事項の回答】

１．ＳＣとの出会いの第一印象
安全を論理的にとらえて、数値化して施策効果を確認する手法に驚きと、これからの安全推進には必要と感じた

２．ＳＣのツールを使って目指したもの
協働の地域社会づくりと安全ナンバーワンのまちづくり

３．ＳＣを初めて良かったと感じること
各セクションや外部の各機関との風通しがよくなったこと
大学連携の新たなツールとして推進できたこと

４．ＳＣの実践を通じて変わったこと
行政からの上から目線でなく、住民と一緒に汗をかくことで、行政に対する住民目線が変わった

５．ＳＣ推進上の今後の課題
担当者の異動に伴う継続性（推進の度合い）

６．ＳＣ関係者のメッセージ
いつ、どこで、何が起こるかわからない時代に、地域の繋がり・絆の大切さを訴えるのに最適な協働事業として、トップが理解し、積極的な姿勢を示すことが必要と考える

７．紹介したい文献